
夏の海の薫り

剣一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の海の薫り

【Nコード】

N0103C

【作者名】

剣一

【あらすじ】

夏休みの1日。俺たちは海に来ていた。現実は何も起きない。実際そんなもの。ただ、それだけ。少年達の日常。本編では描かれていない、夏休みの話。

（前書き）

先に言うと今回の話は海^{カイ}の目から見ています。そして、海^{ウミ}に行きま
すw

物語では混乱しないようにカイはカタカナで書かれています。

さあ、今更番外編ですw

夏です！！海です！！

季節感もなくそもあつたもんじゃありませんw

本編が冬とかの突っ込みも聞こえません。とりあえず呼んでみて下
さい。

そして本編もぜひちらつと…本当にちょっとで良いんで読んでみて
下さい。

「あゝあぢいいい」

俺は青く広がる空に向かって叫ぶ。

「あゝあぢいいい」

隣から同じセリフが聞こえた。

「あんたら余計暑苦しくなるからやめなさいつ。」

後ろから春華の声が聞こえる。隣では俺の親友の隼人が笑っていた。

今日は夏休み。俺は隼人、春華と共に海に遊びに来ていた。

俺は少し磯の香りがする駅を出て、空を見た瞬間に叫んでしまった。それがさっきのセリフだ。

そのまま3人で歩き出す。もちろん海までの案内は俺が担当だ。この2人は今回の計画もいつものように何も手伝ってない。色々文句を言うくせにどっちも手伝って来ない。それでもこの2人とは一緒にいて楽しい。だから一緒にいる。

（まあ、だから面倒くさい事は全部俺担当になっちゃうんだよなあ……）

そんな事を考えながら歩いていると、道が開けて海が見えた。

「おっ海だ」

「わゝやつと着いた」

「ふゝ着いた、着いた。」目の前にはなかなか綺麗な海が広がっていた。シーズン真っ盛りだから人は沢山いた。

早速浜辺で海の家へ歩く。

「ここにすつか。」

俺が一番近かった海の家に入ろうとすると横から春華が文句を言っ

てきた。

「やだ〜もうちょっと綺麗なところがいい〜。」

それを聞いた隼人が文句を言い返す。

「別にここで良いだろ〜変わらないじゃん。」

「いやだ〜」

「文句ばかり言っくなよっ」

「隼人もしよっちゅう言ってるじゃない。」

俺はそろそろ止めに入る。ほっといたら多分この2人はずっと言い合っているだろう。

「はいはい、やめやめ。春華、あそこならいい?」

俺が指を指す先にはここからそう遠くないが結構綺麗な海の家がある。

「ああ〜まああそこなら良いわよっ。」

春華はそう言っていると、先に歩き出す。

「隼人、別にいいだろ?」

「まあ、分かったよ。」

隼人も納得して、一緒に歩き出す。そして、着替えて外で隼人と春華が出てくるのを待つ。ある程度待つと春華が出てきた。

「お待たせ〜可愛いでしょ〜」

春華は俺達に自分の着た水着を見せる。

「良いんじゃない?なあカイ。」

隼人が急に俺に話を振ってきた。

「うん、似合ってるよ。可愛いじゃん。」

「ふふ、ありがとっ。じゃあ美少女も来たことだし、遊びましょ〜」

「胸もそんなにいくせに美少女って…」

隼人がぼそりと呟く。しかしその声は春華にしっかり聞こえていた。(まあ春華は美少女の部類に余裕で入るだろうが…)

「は、隼人お〜!!これでもBカップあるんだぞっ!!」

と言って、胸を張る。周りにいた男の人が春華をちらちら見ている。

「まあ…でも、性格がな〜」

「隼人よりはましよっ」

（どっちもどっちだ…）

「春華の方が暴力的じゃん」

「それは隼人がふざけた事言うからじゃないっ」

「お前らしい加減やめろっ」

「春華の方がいっつも先だろ。」

（シカトですか…）

頼むから騒がないでくれ…周りの目が痛い…

2人を放つといて俺は歩き出す。

「はいはい、アホな事してないであっちに場所取ってあるから、行くぞ。」

さつき春華を待っている時に俺が探しに行つて、場所を取つておいたのだ。

俺が歩き出していた事に気付いた2人は言い合いをやめ、俺を追つて走ってきた。

「カ、カイ、待ってよ〜」

「カイ、ごめん、悪かった〜」

それからはみんなで思いつ切り遊んだ。ビーチバレーや城作り、そもそもろんたくさん泳いだ。当然のごとく2人はちよくちよく言い合っている。

（それでも仲は良いよなあ…まあそれでもなきゃ、いっつも一緒にいないか…）

「あんたのせいで崩れたじゃない!」

「もともと崩れてたし、だいたいこの城にあの形は変だろ!」

こいつらやつぱり馬鹿だ……

俺達は太陽が沈み始める頃海から上がった。水着から着替え、そし

て浜辺で座ってゆつくりしていた。

「楽しかったな。」

俺が呟く。

「だね。」

「うん、来て良かったよ。」

隣に座っている2人の顔はオレンジ色だった。

3人でくだらない話ばかりして、笑い合っていた。
ある程度話して、流れが切れたので俺が切り出す。

「よし、行くか。」

俺はそう呟きながらゆつくり立ち上がる。

「だね。」

隼人も俺を見て、立ち上がり始める。しかし春華は立ち上がらない。

「春華、どうした？」

気付いた隼人が声をかける。

「ん…ちよつと待って…できたっ」

春華は笑顔を浮かべながら立ち上がる。

春華の足下の砂の上には何かが書いてあった。

「何書いたの？」

俺は覗き込む。隼人も俺の後ろから覗き込んできた。

「ふふふっ」

そこには今日の日付そして3人の名前があった。

「これからもよろしくねっ」

「だね。」

「そうだね。」隼人と俺が答える。

「あゝ何か恥ずかしくなゝそろそろ帰ろっ」

それから俺達は海を背にして駅に向かって歩き始めた

――帰りの電車にて――

疲れたのか春華は電車に乗るとすぐに眠ってしまった。そしてこの機会に隼人に気になっていた事を尋ねてみた。

「なあ、隼人この間見たんだけど、お前あの女の人誰？」

「えっ!？」

「髪が長くて、かなり綺麗な人だった。」

「あ、隣の家に来た薫さんだよ。」

誰か分かったところで俺は本題を切り出す。

「そうか……で、俺が聞きたいのはお前がその人の事を好きかどうかだ。」

「え? いや…違う…」

目がかなり泳いでいる。隼人は本当に嘘が下手だ。だからこそ隼人は信用できる。

「ごまかそうとしても、分かるからな。」

「う……まあカイになら言うか…うん、まあ好きだよ。て言うか、憧れみたいな感じかな。」

「そっか。綺麗な人だったしな。」

「確かに綺麗だけど、それだけじゃなくて優しいんだよ。」

「隼人がそこまで惚れる人ならよっぽど良い人なんだろうな。」

「何だよ、それ。」

隼人は少し照れていた。

「隼人も良い奴って事だよ。まあありきたりな言葉になっちゃうけど、頑張れよ。俺は応援してるから。いつでも話や相談なら聞いてやるからな。」

「カイ、ありがとな。」

「気にすんなって。」

それから2人でのんびり話していた。風景は徐々に変わっていく。

「カイ、今日はありがとな。じゃな。」

「おう。またな。」

隼人が先に降りていく。春華は俺を枕にして寝ていた。

乗り換えをしても、また座るとすぐ寝てしまうので、よっぽど疲れていると思った俺はギリギリまで寝かせてやるつもりだった。

それでもさすがに近くなったので起こす。

「ほれ、春華。もうすぐ着くぞ。起きろ。」声をかけながら、揺らすと、少しした後には「っ」としながら話してきた。

「もう着いた？」

「もうちよつとだよ。」

それから少しした後ホームに着いた。2人で下りて、駅を出る。

「んゝ今日は楽しかったねえゝ」

春華が体を伸ばしながら話してきた。

「疲れたけど、楽しかったよ。」

「また行こうねゝじゃあ私こっちだからバイバーイ。」

春華が歩いて行こうとするのを俺が止める。

「待てよっもう暗いんだから送ってくよ。」

いつもはここで別れるが、夏と言えども、さすがに時間が時間なだけあって、もう暗くなっていた。

「カイ、ありがとっゝじゃあ、帰ろっか？」

「ああ。」

こうして俺達の夏休みの1日は終わった。

「ああゝねみいゝ」

「何それ！？せつかく美少女と2人で歩いてるのよ!?!」

「わーっだから俺に絡むな。」

「疲れた。。。。」

（後書き）

ありがとうございました

文章能力が未熟なので、セリフ部分が分かりにくいところがあるかもしれません
失礼しました

読んでもらったので分かると思いますが、今回はカイと春華を目立たせてます。

正直、春華がかなり動いていますが、どうでしたか？
後この時点でカイは隼人の薫への気持ちを知りました
春華はまだ知りません

次はまた本編を進めていききたいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103c/>

夏の海の薫り

2011年1月2日03時08分発行